

# ニジェール支所便り

## 1月号

【編集長】小林支所長 【編集担当】佐々木企画調査員

Tel: (227) 2073 5569 Fax: (227) 2073 2985 E-mail: ni\_oso\_rep@jica.go.jp

### 今月のトピック



- 小林支所長より新年のご挨拶
- 終了プロジェクト・VRACS の皆さんからひとこと
- プロジェクト・専門家等の活動の進捗状況紹介
  - みんなの学校: 住民参加を通じた教育開発プロジェクト(EPT III)
  - 3回 誰でもわかるみんなの学校プロジェクトのモデル解説
  - ~ 補助金有効活用モデルその② ~ 補助金で学習の質を改善する計画方法 ~
- 編集後記

### 小林支所長より新年のご挨拶

皆さん、新年あけましておめでとうございます。ニジェールの新年は1日だけが休みで、そのほかの日は店の営業も通常通りなので、あまり新年らしさを感じませんね。ただ、私がこれまでいた赤道直下に近い国々と異なり、日照時間に変化があるところに唯一季節感を感じています。

今年2016年は言わずと知れた TICAD-year。今回は初めてアフリカで開催される記念すべき回。TICAD-V で計画したこと、また新たな課題について成果を取りまとめ、また、そのプロセスを通じて、協力の質を高める機会にできればと思っています。

翻って、ニジェール国内を見てみると、2月の大統領選に向けて、現イスフ大統領が続投如何によらず、国家復興計画(Programme de Renaissance)、I3Nなどを後継あるいは代替する新たな政策のラウンドに入ることになります。新しいラウンドでは、JICA ニジェールとして、少しでも包摂性の輪を広げることが重要だと思います。というのも、大統領選への若者の対応を見ても、また域内治安懸念が負担となって社会サービスがますます人々に届かなくなっている事実から判断するに、これまでの社会関係が新たに構築し直される時期に来ているように感じるのです。これまで VRACS の FFS や、EPT での学校運営委員会を通じて、人々の社会参加での成果を上げてきたわけですが、今後もこうした協力を継続・強化していくべきだと感じた新年でした。

本年もよろしくお願いいたします。

## 終了プロジェクト・VRACS の皆さんのからひとこと

### 仲田 茂(総括)

2012年2月の末に、ニジェールの土を踏みました。あれから、3年と10ヶ月が経とうとしております。そして、本プロジェクトVRACSも終わりの時がきました。

VRACSは、貯水池を核とした組合活動により、持続的な農村開発をタウア州及びマラディ州において促進するもので、活動は4本の柱からなっております。①荒廃した貯水池の改修、②組合の組織化、③組合活動の実施、及び④ニジェール政府職員の事業実施能力の強化です。第1年目に9つの貯水池の改修、18の貯水池利用者組合の設立、FFSを通じた組合活動の実施、及び政府職員と一緒にプロジェクトを実施する中での、彼らの実施能力の強化を実施しました。2013年1月から発生した、イスラム過激派による一連の事件の結果、日本人専門家は、ニアメからの遠隔によるプロジェクト実施を余儀なくされました。ニアメからの遠隔で可能な活動ということで、PDMが見直され、貯水池を核とした組合活動として実施してきたFFSに焦点を当てることになりました。三本目の柱が大きくFFSに特化することになったのです。貯水池にこだわらず、FFSにより、地域の振興を図ることになりました。加えて、第2年目は、貯水池の改修に替えて、灌漑施設の改修(主に井戸の掘削)を行いました。

2014年10月に実施された終了時評価の結果、組合活動の機能化及び普及員のFFS実施能力の強化を継続して行う必要があるとのことで、10ヶ月の延長が提案され、認められました。

約4年間の成果としましては、上述の貯水池の改修、灌漑施設の改修、貯水池利用者組合の設立に加え、三本目の柱の中で、植林活動、農業資機材販売所の強化なども行っております。そして、政府職員のFFS実施能力の強化に一番力を入れました。その結果、VRACSで作成したFFS手法実施マニュアルの公式化が、農業大臣の署名を得て実現し、カウンターパート機関による、自発的なFFS実施の芽が出てきております。これらに加えて、他機関との協調では、UNDPとの協働なども実行されました。

2012年2月のニジェールで一番暑い時期にニアメにきました。今は朝晩冷え込みます。12月にニアメで過ごすのは初めてです。あの暑い頃が懐かしく感じられます。我々の活動の成果が、今後のニジェールの発展の一助となることを祈って、ここを去ります。

### 小川 慎司(農業普及1)

VRACSで仕事をさせて頂いた3年余りを振り替えると、いまだに忘れることができないのがマラディ州で初めて見た、他の機関によるFFSです。「毎週日曜に集まっている」と語ってくれたグループの婦人リーダーは、自信を持ってその活動内容を説明してくれました。しかし、それは農業試験場がやっているデモファームのようなもので、私たちがケニア森林公社で行ってきたFFSとはあまりにも異なったものでした。FFSには幾つか重要なポイントがありますが、それにおいて「ここと、ここが間違っている」「これと、これは農民の自由な学習を阻害している」と、明確な指摘できるほどフォーカスがぶれており、こんなやり方では農民は「わからない、やらない、変わらない」ことが明白でした。こんなFFSをやらされている農民達が不憫に思えました。ニジェールの人達はケニアと何ら変わりない、素晴らしい能力を持っており、FFSを通じて変わっていくことができるはずなのに・・・

この時の印象がコアとなって、私の中でニジェール既存の



ニアメモデルサイトにて卒業証書をメンバーに渡す小川専門家

FFS や慣習に対する内なるレジスタンスが生まれました。最初の FdF（ファシリテーター研修）を実施したときの普及員達の反発も忘れられません。「グループダイナミクスはシャリア（イスラム法典）が許さない」（自分が恥ずかしくてやりたくないじゃないの？）「ホストファームはでかかないとだめだ」（そんなの FFS の時間内でマネージできるのか？）「試験地の反復は必要だ」（統計的な意味も無いのに？）。幸いなことは他の団員の方の理解を得られたことと、ケニア人のトレーナーであるマサイ氏を十分に活用できる環境をいただいたことです。エクアドルでの苦い経験から、経験のあるケニア人のトレーナーを使ってケニアのプロジェクトで作った FFS を導入したのは正解でした。これがなければ、よい FFS をニジェールに移植することはできなかったでしょう。よい FFS はすぐに農民を変えていくので、実際に現場で普及をやってきた者にはその良さがすぐわかります。今は故人となってしまったマラディ州の農業普及局長のムサ氏や、プロジェクトスタッフはファンになってくれました。一部の普及員がその良さを支持して広めてくれました。彼ら自身もおかしいと思っていたことがいろいろあって、私たちの FFS を見て腑に落ちたのでしょう。前普及技術移転局長のザカリ氏もその良さを理解してくれ、プロジェクトに普及局職員 2 人をつけてくれました。その意味では私たちのやり方の良さを評価してくれるような人には恵まれたと言えます。おかげさまで、VRACS の FFS は国の普及システムの主流となることができました。これはケニア森林公社での FFS 標準化に継ぐ快挙です。ただ、マスタートレーナー研修が実施できず、まだ人材育成が十分できない状態でプロジェクトが終わってしまうことは非常に残念に思います・・・

周りを見回すと、VRACS の調査で行ったブルキナの FFS を思い出します。彼らももっと農民に合わせた FFS をやるべきです。西アフリカには、マラディで最初に見たのと同じような FFS をやっているような国が沢山あるのでしょう。それをみな改善し、参加している農民の可能性をもっと解き放ちたいという夢が沸いてきます。VRACS でこのような素晴らしい機会を与えて頂き、皆様本当にどうもありがとうございました。

## 長井 宏治（農業普及 2）

2012 年 4 月に「隊員の時もこんな感じだったなあ」と感慨深くニアメ空港に降り立って、約 4 年が経過いたしました。ニジェールでは JOCV 時代の 2 年間に加え、VRACS での 4 年間皆様には本当にお世話になりました。プロジェクトの拠点をニアメに移した 2013 年 1 月以降、ニジェール支所・EPT の方には公私共ににお世話になり（特にテニスを共にされた方々には）、貴重なアドバイスをいただきながら業務を実施できたのはとても良い経験でした。プロジェクトの柱である FFS の担当としては、モデルサイトで FFS メンバーおばちゃんたちにかこまれながら、協力隊時代に覚えたザルマ語でコミュニケーションを取ると、とても喜ばれたのが印象的です。彼女たちは、私が日本から戻ってくると、当然のように「おみやげは何？」と言ってくれたのもご愛嬌です。体を動かす前に口が先に動く人たちですが、日本人専門家が動いていると、そのうちついてきてくれました。何かが彼女たちに残っていると期待しています。また、中央政府の職員とも膝をつきあわせて仕事ができただけでなく VRACS の特色でした。通常、今回のような農業案件は地方での活動が主となるため、中央省庁の職員との接点は限られたものになります。VRACS では毎日彼らと仕事を共にすることで彼らの仕事の方法や考え方（何をモチベーションに動いているか）を理解することができました。加えて、農業省次官、普及技術移転局長と本邦研修を共にできたのは、プロジェクト運営においてもプラスのインパクトを残すことができました。彼らと日本での日々を共にしてから、お互いの距離が近くなり、些細なことでも相談できる関係となり、お互いの考え・立場をうまくすりあわせてプロジェクト目標に向かって進むことができたと考えております。その結果、プロジェクト業務を通じ、多くの CP が現場で活動の成果を自分の目で確認して、我々に「VRACS のアプローチは成果を出している」「他の FFS プログラムとは違い農民自身が活動を理解して行っている」という発言が自然とでてくるようになりました。そのような中、プロジェクト開始時から苦労を共にし、本邦研修にも参加したプロジェクトの良き理解者であったマラディ州の CP である Moussa 氏が故人となってしまったのは残念でなりません。改めて冥福を祈ります。

VRACS での FFS はようやくようやくニジェールに根をおろし育ちはじめた段階だと理解しています。これからはいろいろな試練があると思いますが、CP たちがそれらの課題に対処することで VRACS の FFS がニジェール農業省の FFS になっていくと考えます。そのお手伝いを継続していかないはもどかしいですが、何かの機会があると信じています。

12 月には、先日ケネディ橋近くにできたニアメ市内二つ目の立体交差を渡ることができましたが、ニアメから 40km の JOCV 時代の任地の訪問は叶いませんでした。これも次の機会に！

### 小手川 隆志(組織化 2)

VRACS では、延長期間(2015 年 2 月～)から「組織化 2」団員として参画させて頂きました。私の業務は、既に設立している貯水池利用者組合の機能状況を把握すると共に、必要に応じて、追加の研修を企画・実施し、組合の機能状況を改善することにあります。結果的には、VRACS 団員の方々からの支援に加え、C/P やプロジェクトで雇用したローカルスタッフの協力もあり、業務は概ね滞りなく進めることができたと思いますが、事業対象地域の現場を見ないまま、モニタリングや研修企画を実施することに対する不安は、常に感じていたと思います。仮に、私が再度ニジェールに来ることがあれば、その際には是非、自分が VRACS 業務を通じて、関わることとなった地域や組合の方々の顔を、直接見てみたいと思います。ニジェールの治安が一刻も早く改善することを願っております。それから、これは蛇足ですが、ニジェールでかかった病気の影響か、未だに夜になると微熱が発生しています。ニジェールの治安に加えて、私の健康状態が一刻も早く改善することを切に願っております。



セミナーにて講義をする小手川専門家

### 町 慶彦(業務調整/農業普及補助)

私は業務調整として今年 1 月から当プロジェクトの業務調整/農業普及補助として、現地業務に携わりました。業務内容としては、FFS セッションのモニタリング、カウンターパートとの打合せ、会議やワークショップの開催、プロジェクト会計、書類・報告書の作成、ホテルや車輛等の手配等、多岐にわたる業務を行ってきました。

プロジェクト開始時は、業務調整の経験が私はさほどなかったため、カウンターパートとの調整がうまくいかない、手続きがなかなか進まない等、苦い思いをする事が多々ありました。また、当プロジェクトでは事務所がニアメだけではなく、マラディとタウアにもあり、各事務所から毎月提出される報告書や領収書は多く、これらの対応は本当に大変でした。そのため、当初は自分の思うようにいかないことが多くあり、歯痒く思うことが多々ありました。

一方、農業普及補助として、FFS の現地活動に携わっていましたが、活動当初は調子よく進まない事はあったものの、時間の経過とともにメンバーが良くなっていく姿が、私にとって励みになりました。特にニアメモデルサイトの Tondi Koirey 地区では女性のみ FFS グループが活動を実施していましたが、始めはグループにまとまりが無い、参加者が減っていく、FFS セッション中に口論になる等の課題があり、先行きが不安になることがありました。しかし、日本人専門家やカウンターパートの丁寧なアドバイスによって、グループの団結力は日に日に高まり、活動は活発に行われるようになりました。彼女達の活動に対する姿勢の変化に私は触発され、私も彼女達以上に頑張らないと、思うようになりました。

私にとって今年一年はハードな年になりましたが、活動にかかわった現地の人達が成長していく姿を間近で見て励まされ、そして私自身も成長したように思います。プロジェクトの途中からの参加となりましたが、ニジェールにて VRACS に携わることができ、心から感謝しております。ありがとうございました。



**VRACS の皆さん、本当にお疲れさまでした！**

## プロジェクト・専門家等の活動の進捗状況紹介

### ■■みんなの学校：住民参加を通じた教育開発プロジェクト(EPT III)■■■■

<http://www.jica.go.jp/project/niger/002/index.html>

旧年は大変お世話になりました。

プロジェクトのスタッフ、ニジェールのカウンタパート一同、  
みなさまに、新年のお祝い申を申し上げます。あけましておめでとうございます。

さて、12月は通常の間と同様、質のミニマムパッケージや中学校 COGES に係る活動も行われる中、1日から16日までプロジェクト終了時評価調査が実施されました。調査では今フェーズのPDMで規定された指標に係るデータ分析と学校運営委員会関連の現地アクターへのインタビューの結果を5項目で評価し、提言も含めた報告書にまとめています。この報告書に関するニジェール側との協議が行われ、その協議議事録に、12月14日調査団団長と初等、中等の両教育省次官が署名しました。

調査結果の説明は、今回の調査団の現地報告書の引用で代えさせていただきます。この報告書の団長所感で、調査全体が以下のように要約しています。

「プロジェクトはほぼ全ての指標で目標を達成しており、5項目評価においても妥当性が非常に高く、有効性、効率性、インパクトも高い(持続性は中程度)としている。ニジェールという難しい環境の国で、このような非常に高い成果を上げていることは称賛に値する。これは、日本人専門家も含むプロジェクト現地スタッフ、ニジェール側カウンタパート(地方行政官など)の

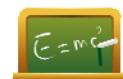
尽力によるものである。しかし、このプロジェクトの本当の主役は、圧倒的な(資金等の)動員を続けてきた住民である。プロジェクト期間中の住民からの動員額は 18.6 億円にも上るといこともさることながら、これが一過性の資金動員ではなく、プロジェクトが構築した“機能するCGDES”とそのモニタリング体制により、今後も続いていくということである。残念ながら、現在の評価の在り方では、この毎年 5～6 億円を住民自身が動員していること、住民—学校—行政の信頼関係を構築したからこそ、これらが成し得ていることなど十分に表現することができない。ニジェールのような最貧国における 1 つのベストソリューションとして引続き JICA 内外へ継続的に発信していく必要がある。」

毎日、深夜まで、作業をされていた評価団の団員の方々、調査に協力していただいた JICA 支所、初等および中等教育省関係者、学校運営委員会委員、住民の方々に深く感謝します。

それではみなさま今年もよろしくお願い致します。

みんなの学校;住民参加による教育開発プロジェクト  
専門家一同

### 第3回 誰でもわかるみんなの学校プロジェクトのモデル解説 ～補助金有効活用モデルその②～ 補助金で学習の質を改善する計画方法～



この稿では、“みんなの学校にはいろいろなモデルがあるが、区別がつかないし、内容もわからない。”という声に答えるべく、みんなの学校のモデルを説明しています。興味のある方は是非一読ください。第3回目は、補助金有効活用モデルその②です。補助金有効活用モデルは、住民を初めとした学校関係者に対する2種類の能力強化から構成されています。この能力強化のうち、今回は学校補助金を有効に使い、学習の質を改善するための計画方法についてご説明したいと思います。今回は、少し複雑で長めの説明ですが、最後までお付き合いください。

#### 前回のおさらい

今回の解説をする前に、「補助金有効活用モデルのその①」をおさらいしたいと思います。前回説明したコミュニティオディット(住民監査)は、学校補助金についてのすべての情報をすべての関係者に公開することにより、補助金の管理を「衆人監視」の状態にし、不正を未然に防ぐことを可能にしたモデルでした。実際このモデルの導入により、不正はなくなり、会計のミスも減り、証票書類も適切に集まり、良好な補助金管理が可能になりました。しかし、補助金が良好に管理されても、補助金の供与の目的が学習の質の改善だった場合、その目的が達成されるとは限りません。どうすれば、補助金が質の向上に有効に作用するのか。この課題に取り組んだのが、今回説明する「補助金と住民参加で学習の質を改善する計画方法」なのです。

#### 質の改善計画モデル策定のきっかけ

この計画方法について考え始めたきっかけは2つあります。ひとつは、みんなの学校プロジェクトで最初に導入した活動計画策定方法が、質の改善にあまり効果がでないことに気づいたのです。この計画手法は、学校の現状分析を校長や教員だけでなく住民と一緒にやるということに重点を置いた手法でした。結果として分析後選ばれ実施された活動は、住民が学校の改善ニーズとして重要だと認識していたものでした。アクセスでは、仮設教室の建設や机椅子の修理、就学促進啓発など、質改善では、教科書、文房具の購買や教員支

援、受験生への補習支援等が活動として選ばれ実施されてきました。アクセスでは仮設教室建設が、入学率の向上に結び付き、誰の目にも明らかな結果を出していました。一方、質の改善に係る活動は、数多く実施され、住民の改善ニーズが高いことがわかりましたが、顕著な結果がでないことがわかったのです。どうして結果がでないのだろうと首をかしげました。

もう一つのきっかけは、セネガルに出張した時に、「学校プロジェクト」<sup>1</sup>の現場を見て、関係者の話を聞いたことでした。私が訪ねた学校では、学校プロジェクトで供与された予算のほとんどを使って図書室を作っていました。同行した視学官に聞いたところ、彼の担当の学校プロジェクトのすべてで図書室建設が計画され、実施されたと言っていました。理由は、学校プロジェクトでは補助金を一定期間に使いきる必要があり、計画策定、見積、支払等非常に手間がかかるので、視学官として、彼が担当校に対して、金額に見合っただけで効果がでない活動として、図書室建設をアドバイスしたからだ、胸を張っていました。その話を聞きなが

ら、「読み書きがあまりできない生徒に沢山の金をかけて図書室を作って効果があるのか？」と思いました。

この二つのきっかけで、教育の質に焦点を当てた活動計画策定方法について、具体的に考えるようになりました。

教育の質を改善するのが計画策定の目的であれば、当然、その学校の教育の質のレベルを知り、問題を分析して、課題を抽出し、その課題に対し、有効な活動を特定し、計画するというプロセスが必要です。みんなの学校当初の活動計画手法では、このプロセスは明確ではなく、質の改善に効果がでなかったのです。セネガルの学校プロジェクトの場合は、マニュアルには各学校の卒業試験合格率や退学率、修了率など内部効率や質を示すいくつかの指標を示し、その指標をもとに活動を探せという方法が書かれていました。論理的に見えますが、この方法では、各学校の教育の質を保証するさまざまな条件や要素を分析することができず、学校が個別の質の問題を直接解決する現実的な活動は見つけれません。

### 質の改善に結果がでる計画方法の内容

こんなことから、プロジェクトでは、教育の質を保証する要素を規定し、要素毎に、それぞれの学校の状況を分析して、その学校で、教育の質を保証するのに欠けていたり、不足していたりするものを見つけ、不足や欠如の部分を補い、埋める活動を探していくという方法<sup>2</sup>を基本に据えることにしたのです。そして教育の質を規定する要素として、学習時間（生徒）、学習環境（教科書）、教授の質（教員）を選択しました。この要素から、分析していくと、多くの学校で、新学期の遅れや、教員の欠席などで、学習時間は足りず、学習環境も悪く教科書も不足していて、教員の質も十分ではないことがわかりました。この分析方法により、それぞれの学校で質の問題を解決できる適切な活動を見つけ、それを実施すれば、必ず質は改善することがで

<sup>1</sup> 当時学校プロジェクトは広くセネガルやニジェールなど西アフリカで行われていた学校補助金の一形態です。学校側が教育の質の改善を目的としたプロジェクト（計画）を作り、その計画を教育省が検証した上で、ファイナンスします。一つのプロジェクト当たりの予算が大きいのが特徴でした。

<sup>2</sup> この分析方法で、セネガルの学校プロジェクトの例を考えてみると、図書室の建設は学習環境（教科書）の要素の範囲ですが、この要素内の何が欠けているが分析していないので、この活動が学校が抱えている問題の改善策になっていない場合も考えられます。仮に、それが適切な解決だったとしても、それらの学校の学習時間や教授の質は十分なのでしょうか。対策に対応する改善策が実施されるのでしょうか。こう考えてくると、補助金の効果的な使い方という観点から、図書室建設より、もっと、ニーズや緊急性が高く、効率的な活動があったという可能性が高いと想定できます。

きます。その意味で画期的でしたが、住民レベルでできないこともあります。そこで、プロジェクトが予め住民がそれぞれの要素でできる活動を特定しておいて、それらの活動を学校の活動計画策定時に参考にしてもらうことにしました。こうして出来上がったのが、現在のみんなの学校の「質に焦点を当てた活動計画」策定手法です。いまでは、ニジェールすべての学校に普及されています。この手法のおかげで、例えば、ニジェールの小学校は、先生の欠席や始業の遅れにより失った数百時間の学習時間を学校運営委員会が支援した補習のおかげで年間平均 170 時間ほど回復したという素晴らしい結果を残しています。しかし、補習以外、補助教材の購入など、お金のかかる活動はあまり実施されていません。そのため、質の改善は限定的でした。そこで住民には支援できない活動を補助金で補ったらと考え始めたのが、「補助金と住民参加で学習の質を改善する活動計画方法」となりました。つまり、この計画方法は、もともとみんなの学校の計画策定方法をベースとして、住民の支援による活動と補助金による活動を組み合わせることにより、質の改善へのシナジーを目指したものでした。

### 汎用性はあるのか

前回、ミニマムパッケージの汎用性を検討した際にこのような分析をしました。「普遍的モデルは普遍的ニーズに対し、すでにその効果が証明されている原則を適用化した改善策をもつ」これに対し、「補助金と住民参加で学習の質を改善する計画方法」はどうなのか。学習の質を改善するというのは、教育におけるすべての関係者にとっての普遍的なニーズです。そして、この計画の分析手法は、すでに多く検証され証明されている仮説に沿ったものです。また、採用される活動の一部は、生徒の学習時間が延びれば、学力が改善するといった、これもまたすでに検証された理論に沿ったものです。したがって、このモデルも普遍性が高いと言えると思います。

### 成果と限界

このモデルの成果は、JICA 研究所で行ったインパクト評価で科学的に検証されています。このインパクト評価は、補助金供与の効果測定を、まったく介入がない学校、補助金供与のみの学校、補助金の管理能力強化と補助金を利用した質改善有効活動の能力強化を受けた学校のグループに分けて行いました。調査の結果、能力強化したグループの学力が、能力強化を行っていないグループより、大きく改善していることが証明されました。この結果は、プロジェクトの仮説を証明しましたが、学力の向上は、期待するほどではありませんでした。もともと、算数やフランス語の実力がとても低い生徒が多いのがニジェールの教育現場です。もっと効率のいい方法がなければ、彼らの識字や計算能力を付けることはできません。

### 更なる挑戦

なぜ、質の焦点をおいた計画方法、さらに補助金を導入しても、期待したほど成果がでないのか、プロジェクトでまた考えました。その結果、質を規定する3つの要素、学習時間（生徒）、学習環境（教科書）、教授の質（教員）の内、教授の質（教員）の要素の改善が出来ていないことが、その原因だとわかりました。それでは、どうすれば、この限界を超えることができるのか、ここから、みんなの学校の新しいモデル作りの挑戦が始まりました。

※つづく

プロジェクトチーフアドバイザー 原 雅裕





## 編集後記



皆さま、明けましておめでとうございます！

暑さもだいぶ和らぎ、肌寒さすら感じるニアメより、新年のご挨拶を申し上げます。

2016 年も皆さまにとって実りの多い、素晴らしい年になることをニ Jewel 支所スタッフ一同心よりお祈りいたします。また本年もニ Jewel 支所の活動やニ Jewel 国内の出来事など、皆さまに楽しんで頂ける記事を掲載していきたいと思っております。今後ともご愛好のほど、よろしくお願いいたします。

ニ Jewel 支所一同

## お知らせ

ニ Jewel を知って、  
ニ Jewel を好きになろう！

### ★ 1/17 第 1 回ニ Jewel 文化の日 ★

この度、在日本ニ Jewel 人会の主催で、「ニ Jewel 文化の日」が開催されることになりました。

詳しくは、[http://www.jica.go.jp/hiroba/event/2016/160117\\_02.html](http://www.jica.go.jp/hiroba/event/2016/160117_02.html) にて紹介しています。

皆さま、お誘いあわせのうえ奮ってご参加ください！

13:00～16:00（開場 12:30～）@JICA 地球ひろば（JICA 市ヶ谷ビル内）